



僕はもう引き返すことは出来ない。可愛いマーサのためにも。

手のひらに、じとりと嫌な汗が滲んできてズボンにこすりつけた。額から滝のような汗が流れてきて視界を曇らせるが、幸いにして暗闇が隠してくれている。後ろからついてくる酔っぱらいは、まだ何の疑問も抱いてはいないようだ。

あと少し、少しだ。

緊張で膝から下に力が入らなくなりそうになり、思わず歯を食いしばる。

あともう少しでマーサのために僕は。

六月一日。マーサが死んだ。僕の可愛い妹のマーサ。

崖下で冷たくなっているのを母さんが見つけてトーマス先生のところへ運んだけれど、どんな名医でも死体を生き返らせることは出来なかった。可哀想なマーサ！

ブルーのワンピースに白いブラウスがとても似合っていたマーサ。棺へ入れる時にその服を着せてやると、母さんは大声で泣いて華奢な身体に縋りついた。

だけど涙はすぐに悲しみから恐怖に変わった。憎むべき悪魔、ジェームズがふらりと帰ってきて母さんをぶった。

棺に収まったマーサには目もくれずに、酒を飲みながら母さんをサッカーボールみたいに蹴りあげては、ゲラゲラゲラ笑っている。僕はマーサに呪われた笑い声を聞きながら眠りについてほしくなかったので、小さな耳を急いで塞いだ。

ジェームズは僕らの家に居ついた悪魔である。僕とマーサが小さい時にお父さんは兵隊へ行ってしまい、母さんは気がつくとその男を家に招き入れるようになっていた。

当時、まだ男と女について考えたなどなかった僕には、この男が我が家に頻繁に訪れる理由を理解していなかった。

やがて母さんがジェームズを愛していることを知り、父さんが戦死したことを知った。最初、ジェームズは良き父親を演じようとしていたみたいだが、それはわずか三カ月あまりで終わった。気まぐれなゲームのつもりで、奴が父親ごっこをしていたことに、僕らは気付くのが遅すぎたのだ。

七匹の子ヤギのように、開けてはいけないドアを開けて悪魔を迎え入れてしまったという現実を知る日は突然やって来た。

ある夜、酒を浴びるようにして飲んで帰って来たジェームズは、いきなり僕らの目の前で母さんを殴って床に倒し、ゲラゲラと笑って椅子に踏んぞり返り、母さんをカーペットみたいに踏んだ。

突然の豹変ぶりに母さんも僕もマーサも言葉を発することも出来ず、事態を把握するのに時間が必要だった。ただ、僕は自分の手がぶるぶると激しい痙攣をした感触だけを覚えている。朝までは何事もなく笑顔で僕らに朝の挨拶をし、頭を撫でてくれた男は仮面を剥がし、夜の闇に乗じて本性を現した。

「俺がこんなしみつたれた奴らの家族になんかなるかよ！ここは俺の家だ、下僕で家畜、それがお前らだ！」

紙のように真っ白な顔になった母さんは、その夜からろくに口を聞けなくなった。か細い声でささやくようにしか会話を交わすだけで精一杯という、今までの明るく澆刺とした生命力溢れる母さんは影も形もなくなった。

ジェームズが酒に酔って暴れたり、ろくでもない連中を連れ込んで騒いだりすると、マーサは顔を真っ赤にして泣いたが、ジェームズが黙らせようとして暴力をふるうので僕は慌ててマーサのいちごキャンディみたいな口を塞ぐようになった。

まさに悪魔が我が家に棲みついたのだ。ジェームズは近所の人々にまで暴力をふるい、罵詈雑言を浴びせかけるので、年の近い友だちは誰も遊びに来てくれなくなり、誰も僕ら家族に声をかけてくれなくなってしまった。

買い物へ出かけても、どこの店も怯えたような目で僕らを見て、さっさと用件を済まして別の客の方へ行ってしまふ。いつもお菓子をくれた果物屋のおばさんでさえ知らないふりをした。

母さんは台所の隅で隠れて泣くのが習慣になった。僕らの世話をする余力など母さんには残されていない日々が続いた。

絶対的な孤独を僕とマーサは、ふたりで遊んで誤魔化した。

僕の遊び相手はマーサだけであり、マーサの遊び相手も僕だけだった。兄妹というよりは、まるで双子のような気分だった。

きっと僕らは母さんのお腹の中で、必要なもの全てを半分こにして産まれてきたのだ。いつか僕は確信に近い思いを持った。別ち難しい絆が僕とマーサの間にはある。

だが、僕の片割れであるマーサはいきなり消えてしまった。

葬式の日が来て、飲んだくれて眠っているジェームズが目を覚ます前に、僕と母さんは急いでマーサを埋め始めた。静かな眠りを与えてやりたいのに、ジェームズが目を覚ませば邪魔にされるに違いない。

牧師様はジェームズに怯える様子もなく、僕らの傍に居てくれた。相変わらず、村の人たちは誰も来てくれなかったが。

汗を流しながらマーサの棺を土に埋めていると、ぴちちと雀の鳴き声がして顔を上げると雀の大群が古い屋敷へ飛んでいくところだった。空が黒く見える程の大群には母さんと僕と、牧師様は声を失った。スコップを落としそうになって、僕は急いで視線を下に向ける。

すると、半分ほど土に隠れたマーサの棺から、白い煙のようなものがスルリと昇ってきて、雀たちが飛んで行った方向に流れていくではないか！

あっと声をあげかけたが、僕以外の人には見えていないらしく何も言わず作業している。

マーサだ。

胸が高鳴るのを僕は抑えた。マーサはまだ僕と同じ世界にいる。

葬式が終わり、目覚めてから一通り騒ぎ、再び飲んだくれたジェームズが眠りについたのを確認してから僕は家を抜け出した。母さんは大抵目を覚ますことはない。現実と夢の境目が怪しいからいつも起きながら寝ているようなものだ。

昔、小説の中で雀は死者を連れ戻す使者だと聞いたことがある。もし本当だとしたら、マーサと会える時間は限られている。

雀たちが飛んで行った方向には僕が生まれる前から無人の屋敷が建っている。ゴシック調の屋敷の尖がったアーチが珍しくて、時々マーサと眺めに来た。

古い洋館にたどり着くと黒塗りの門は開いており、玄関までの小道を抜けて入口に到着した。道の両側には花壇があり、往時はさぞ美しい庭であったろうことを示している。

ドアは全体的にくすんだ色合いの屋敷に相応しくないほどに、派手な赤色だ。年月によって霞んできてはいるが、驚くほど存在感がある。ドアノッカーを鳴らしてみても反応はない。

マーサがいるのなら返事をしてくれるかと期待したが何の音もしない。鍵がかかっているかもしれないとノブに手をかけると、すんなりと回り、軋んだ音を上げてドアが開いた。

黴くさい匂いと埃の大群が一度に襲いかかって来る。鈍い月光に照らされた屋敷の中は、荒れ果てていたが、調度品は見ることがないようなものばかりである。

僕は恐怖を忘れて中に入り込んだ。すぐにドアが音をたてて閉まったが気にならなかった。

月夜の中で見る壁にかけられた絵画の数々はうっとりするぐらい鮮やかで、棚の上に飾られている壺や、埃まみれの北欧製の家具たちは、子どもの僕から見ても高級そうだ。

この荒れ屋敷がいつからあるのか、僕には思い出せない。うんと古くからあるのだろうか。母さんに聞いてみなければ分からないだろう。

玄関ホールだけで屋敷に圧倒されていた僕は奥に螺旋階段と、ドアが2つあるのを見つけた。恐る恐る螺旋階段を上り、二階の廊下に出ると奥の方から何か音がする。

猫かネズミだろうか。野良犬は危険だから嫌だなと警戒しながら歩いている内に、廊下の一番奥にある部屋の前にたどり着いた。引き寄せられるようにして、僕はその部屋のドアを開けた。無意識の行動で、まるで僕の身体が僕のものでないかのように、勝手に手が動いた。

バサッバサッと翼の音が、部屋の向こうから聞こえてくる。屋間の雀たちが休んでいるのだろうか。いささか興ざめの気持ちで扉を開けると、真っ暗な静寂が流れてくる。ヒヤリとしたが気持ち悪くはない。

窓から入る月光が床に丸いステージを作り、真ん中にブルーのワンピースと白のブラウスを着て、赤茶色のおさげをピンクのリボンで結んだマーサが笑顔で立っていた。

「おにいちゃん」

はにかんだ顔でマーサが僕を見上げる。僕は跪いてマーサの小さな手にキスをした。驚くほど冷たい感触が唇から伝わってきて、僕は涙をこぼす。

「マーサ！ ああ、マーサ！ 可哀想なマーサ！」

「おにいちゃん、マーサはジェームズにころされたの。もうおさげのまないでっていったらなぐられて、がけからおとされたの。マーサ、からだがいたいよう」

ワンピースの裾を握りながら、マーサがしくしくと泣き出す。

僕は頭の中が血の色に染まり、呼吸困難に陥り、全身が激しく痙攣して危うく白眼を剥いて気絶するところだった。こんなにも激しい感情など経験したことがなかったので対処が難しい。深呼吸を何度も繰り返してようやく身体の痙攣がおさまった。

「マーサは、おかあさんとおにいちゃんがしんぱいな。ジェームズはみんなころしちゃう！こねこのミーナもころしてマーサもころしたものだ！」

「マーサ！天使のようなお前が天国に行けずに、この世にとどまらなくてはならないなんて、どうした不幸だろう！お兄ちゃんがお前を天国へ行かせてやれたら！」

僕は必死にマーサを昇天させるべく考えを働かせる。

顔を上げて、よくよくマーサを見て決心した。

「マーサ、お兄ちゃんの話聞けるかい？」

生前と同じように照れた顔をして、指をにぎにぎとしながらマーサは頷いた。

ポートノル家というのが荒れ屋敷の、以前の持ち主の名前だった。

不思議なことにある時から一族に女ばかりが生まれ、ついに屋敷を継ぐ者がいなくなったので放っておかれているのだという。

何でも高貴な血筋の一族で、たんまりとお金を持っていたらしい。噂では屋敷にはまだ積み出されていない金貨があるとか、隠し財産があるとか、金にまつわる話が多い。母がぼつり、ぼつりと聞きとりにくいほどの小さな声で教えてくれた。

だがその一方で、屋敷の中でポートノル家最後の人間が自殺をしたという事件があり、人々は縁起の悪い屋敷に近づかなかった。

ポートノル家の末裔が自殺する前に、村でたくさんの少女たちが失踪した事件と不吉な自殺を関連あるものとして結びつけ、村の牧師様は呪われた屋敷だと断言し、子どもたちの遊び場にしないよう注意を呼び掛けていた。

僕はジェームズとポートノル家がかつて栄華を極めた屋敷の中に居た。

「おい、確かに金貨を見つけたんだろうな」

「うん、床板を剥がして見つけたんだよ。隠し財産の噂があったから調べていたんだ」

狡賢い瞳が僕の頭からつま先まで、点検するように眺めまわす。まるでそ発見機にかけられているようで、心臓が高鳴る。

「しかし、お前は俺が嫌いだろう？何で俺に教える？」

「あなたなら他の誰かに横取りされるようなへまはしないだろうし、僕には金貨が本物かどうか見極める目がないもの」

あらかじめ考えていた台詞が苦もなくスラスラ出てくる。まるで自分ではないみたいだ。

「まあいい、急いでお宝の場所へ案内しろ！万が一誰かに先を越されたらかなわんからな！」

酒とたばこをかき混ぜた、生臭い口臭が鼻をつく。顔をしかめるのを堪えて、僕は廊下の奥を進んだ。

「この部屋で見つけたんだ」

「どれ」

鼻息荒く、ジェームズは扉を開けはなった。

鈍い月光が今宵も部屋の中を静かに照らしている。月光のステージには、昨夜同様マーサが立っていた。

右の眼球が頬まで垂れ、頬がこそぎ落とされて歯列が見え、右手が幾重にも捻じれており、右足のつま先は反対側を向いており、左の脇腹から内臓がはみ出した僕の可愛いマーサ。

「わあああああああ！」

間抜けなほどに取り乱して、ジェームズは尻もちをついた。僕には例えマーサの身体がどんなに崩れていても愛しいマーサであることには変わらない。

昨夜もマーサは崩れた身体で僕の前に現れたが、僕は恐怖など感じなかったし、むしろ激しい愛情を覚えた。

「迷い出やがったか！お前は死んだんだ、とっとと地の国へ行け！」

震えた声で怒鳴り散らし、這いずりながらドアの方へやって来たので、僕は背中に隠していた、鋭い光を帯びた肉切り包丁を取り出した。

「て、てめえ！」

「何してるの、はやく金貨を取ってきてよ。マーサの後ろにあるんだ」

「てめえが取りに行け！妹の亡霊なんぞ兄なら怖くないだろうが！」

僕は包丁をジェームズ目がけて振り降ろした。ぎゃっ、と声かしてジェームズの額から血が飛び散る。

「はやく取ってきてよ」

ゼエゼエと苦しそうな息をして、ジェームズは額を抑えてじっとしている。

「金貨を取ってきたらお前ら家族は、皆殺しだ。覚えとけよ！」

僕が本気で自分を刺すつもりだと、ようやく理解したジェームズは、悪態をつきながらのろのろとマーサに近づく。

身体が崩れたマーサは微動だにせず、近づいてくる男を垂れ下った眼球で見つめている。青い瞳のマーサ、片目はもうない。

僕は後ろからゆっくりとジェームズに近づく。

マーサの背後にはきらきら光るものが見える。ジェームズと僕はゆっくりと歩を進める。

「あれか、あれが金貨か！」

欲の前に恐怖を忘れたジェームズが駆けだしてマーサの横を過ぎ、光に向かって飛び込もうとした。

ぴちち、と鳥の鳴き声かして部屋の中に羽音が鳴り響く。

「な、なんだ？」

風がびゅう、と吹いた。鳥たちがざああ、と天を目指して羽ばたいていく。

「これが、とっておきの手だよ」

ジェームズが飛び込もうとした先は開け放した窓だった。輝いていたのは外の木に吊るした折り紙である。僕が昼間に身体を伸ばして引っかけておいたのだ。

あっと声を上げる間もなく、ジェームズという名前の悪魔は屋敷の窓から転落した。

グシャリ、と潰れる音がした。

五月三十日、ジェームズが死んだ。

僕の二十一人目のマーサが死ぬ二日前の出来ごとだった。

ポートノル家。今となっては懐かしい響きだ。亡霊となってさ迷い続けてからは忘れていた名前だった。

一族は裕福で由緒正しい血筋の家柄だった。僕は何の不自由もなく暮らしていたが、ある日流行病にやられて妹のマーサがあっさり死んでしまった。

可愛いマーサは恐ろしい病のために身体が腐り崩れた。眼球が腐って青い瞳があった場所は空洞になり、片目は飛び出して頬に垂れた。

苦しみのあまり身体を振っていたので、死んだ時には身体中の関節が不自然な方向を向いていた。耐えられない痒みのせいでお腹を掻きまじり、もろくなった皮膚は破れて内臓が飛び出した。

僕の可愛いマーサ！誰よりも愛していたマーサ！マーサのためなら命も惜しくなかったのに！彼女のいない世界など僕には耐えられなかった。

だから僕は近隣にすむマーサと同じ年の少女を連れてきて、僕のマーサにした。緑の瞳のマーサ、茶色の瞳のマーサ、灰色の瞳のマーサ、赤毛のマーサ、金髪のマーサ。どのマーサも可愛らしかったが、すぐに屋敷からいなくなるうとするので僕はマーサを埋めるしかなくなってしまった。

しかし、ずっと一緒に居られるとしても話すことの出来ないマーサたちは僕の孤独を更に深めた。だから僕はマーサを探し続け、屋敷に招き入れ続けたが僕にも寿命が来てしまった。仕方がないので僕は首をくくった。

だが僕は死ねなかった。肉体は滅んだはずなのに（何故なら梁から釣り下がっている自分の身体を見たからだ）、僕の精神はふわふわと漂っている。雀たちがやって来て、死者の国へ誘うが僕は行こうともがいても行き方が分からなかった。

ますます僕の孤独は深くなり、マーサを探し求めた。そのうち、僕は生きている人間を操れるようになった。いや、この言い方は語弊がある。生きている人間と一体化出来るようになったのだ。暗く冷たい場所に立たされた人の心は住み心地が良かった。

とても住みやすい環境を提供してくれたお礼に、僕はこの少年の心にある願望を叶えてあげた。まるで天の国にいる神様のように。死んだ僕のマーサを救うために、僕は少年と力を合わせたのだ。

ああ、墓場からマーサの身体を持ってきてやらなくては。

そしてこの部屋に眠るたくさんのマーサと一緒に埋めてあげるのだ。寂しくないように。

そして二十二人目のマーサを探しに行こう。この少年と共に。

少年も再びマーサと暮らすことを望むだろう。僕らの可愛いマーサ。

伏せているエースのカードは今日もめくられることはない。僕は永久に天国行きのエースのカードをめくることが望まないだろう。

何故ならここにはたくさんの愛すべきマーサがいるのだから。

青い瞳のマーサ

<http://p.booklog.jp/book/25642>

著者：森山

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/next7/profile>

表紙画像：戦場に猫〈いくさばにねこ〉様

<http://catinthedeath.web.fc2.com/index.html>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/25642>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/25642>